

居神浩編著

# 『ノンエリートのための キャリア教育論』

——適応と抵抗そして承認と参加』

評者：有田 五郎

本書は、大学全入時代に職業的自立が困難な「ノンエリート」（良い学校・会社へのルートに乗れなかった人たち）への教育支援のあり方を、編著者・居神が熱い想いを込めて述べた力作である。

編著者が「まえがき」・「序章」・「終章」・「あとがき」でその考えを解説し、第1～7章は様々な分野で活躍されている著者9名の論文を「リサーチ・トピック」として構成している。「あとがき」に出版まで5年を要したと触れられているごとく、編著者の論点が各著者の専門分野や現場での生の声、データとその分析によってしっかりと裏付けされている。ただ各章は各著者それぞれの論文となっており、章が変われば場面だけでなく文体などもがらりと変わっていることは否定しえない。本書の内容の紹介については、編著者が執筆した部分が基本線となる。

## 1 本書の内容

編著者は「まえがき」において、「ノン」は否定のニュアンスではなく、これまでの生き方の「見直し」であり、これまでとは異なる生き方を「(肯定的に)引き受ける」という意味での捉え方を求めている。また、編著者は本書

が、「いま・この現場」からの報告をもとに、同じ悩み・思いを抱える人々の「共感的理解」を共有し、「批判的な問い」を立てる「問いかけの書」となることを目指している。社会への「リサーチ・トピック」の提供から論点を絞り込む試みと言える。

本書の構成は以下のとおりである。

序章 ノンエリート大学生のキャリア教育の課題——「適応」と「抵抗」（居神浩）

〈第I部 大学におけるキャリア教育論の実践と課題——「適応」と「抵抗」の側面〉

第1章 ボーダーフリー大学生が学習面で抱えている問題——実態と克服の途（葛城浩一）

第2章 やる気に火をつけろ！——読売新聞「大学の實力」調査から（松本美奈）

第3章 ノンエリート大学生の労働者の権利に関する理解——キャリア教育における労働者の権利教育の実施に向けて（林祐司）

第4章 権利を行使することの困難と希望——NPO法人「きょうと労働相談まどぐち」と労働問題講座（高橋慎一・橋口昌治）

〈第II部 大学外部におけるキャリア支援の取り組み——「承認」と「参加」の側面〉

第5章 ノンエリート大学生を対象としたキャリア教育の射程——生活実態に根差したキャリア教育／支援に向けて（児島功和）

第6章 地域若者サポートステーションによる高校アウトリーチが示唆するもの——キャリア支援と心理支援の融合の重要性（熊澤真理）

第7章 教育的アプローチによる自立支援の課題——「子どもの貧困」問題を通して（上原裕介・繁澤あゆみ）

終章 これからのノンエリート・キャリア教育の展望——「承認」と「参加」に向けて（居神浩）

序章で、編著者は、教育は社会政策論が追究すべき政策対象領域とまず規定し、ノンエリートを次のようにとらえている。非正規社員の増大により階級社会に「階級以下の存在」、つまり「アンダークラス」が生まれた。アンダーク

ラスの貧困問題は新たな社会問題である。高等教育大衆化の結果、高等教育が多様な階級への労働力供給を行っている実態がある。労働者階級とアンダークラスを「ノンエリート」と呼び、その社会問題に対して「教育」から問題解決に挑んだ。「ノンエリート」はノンエリートなりの矜持を持って「みんなで」考えていくことが大事である。

さらに、高等教育より前の段階に目を向けて、編著者は次のように述べている。高校までの教育の結果が大学生の基礎学力の低さにつながっている。社会で働くためにあるいは社会に求められるために初等・中等教育で必要なのは「学び直しに効く学力」であり、これが「適応」のための能力といえる。生徒に「つながり」を意識させることに学校全体で取り組んで欲しい。そして抵抗できる気概を持たせることが大切である。

教育の論理を越えた課題を抱えた学生が多く存在しており、個々への対応が求められているなか、まずは現場での現実を知ることの意味がある。「市民性の育成」を目指して、各レベルの教育機関がそれぞれの役割を果たすことが必要である。学生側ではアルバイトの常態化があり、高等教育費負担の政策論争が必要な時期に来ている。政策論争の争点の一つは大学数の削減である。このことがこの国全体のマンパワーを「イノベーションを担う少数のエリート」と「低技能・低賃金の大多数の大衆」との二極化へと向かわせる可能性が大きい。自然淘汰という結果を待つのではなく、政策論が必要であるというのが編著者の主張である。

第1章では、ボーダーフリー（入試選抜なし）大学生の学習面での問題と教室での生態が説明されている。著者はボーダーフリー大学の教員に学生の学習習慣や学習レディネス向上に意識的に取り組む姿勢を求めている。それが

「努力」の重要性認識につながるとしている。そして「履修主義」から「修得主義」への転換が大事との指摘がなされる。具体的には著者は、相互作用型授業で他者の評価や考えを知る重要性に着目し、授業の意味を分からせる工夫が不可欠としている。学生個々と向き合うという要点は不変であり、もっと教育に時間をかけること、という基本を見直す姿勢が改めて強調されている。

第2章では、大学改革の流れに対して、著者は、高校の進路指導の方向性と生徒の「行ける大学」指向の姿勢を問題視している。ノンエリート学生にやる気を起こさせるための大学・教員による各種工夫が具体的に紹介されている。そして、「承認」と「居場所」の重要性を指摘した上で、さらには教員養成課程の見直し、具体的には道徳教科の拡充と進路指導側の学びを提言している。

統計分析の第3章は、労働者の権利には理解が難しいものと易しいものがあるとの確認から始まる。研究設問についての分析結果として、著者は、アルバイト経験と情報検索行動が労働者の権利理解に及ぼす効果について考察している。その結果、単にアルバイトの経験が労働者の権利理解を促すのではなく、それをきっかけとした情報検索行動によって理解に至るとまとめている。労働者の権利と就職活動に関して、著者は、労働者の権利について易しいレベルの理解が就職活動の初歩に有効であり、難しいレベルの理解は労働環境の重視につながるとしている。特に受け身な学生にその傾向が見られ、労働者の権利教育と意識面の教育を合わせて行うことが好ましいとの見解である。

第4章では、労働組合の位置付けと役割解説、そしてそれを理解してもらうための大学での出前授業の内容紹介がなされている。若者の労働問題やユニオン活動の課題について労働社

会学者・橋口昌治氏にインタビューした内容紹介と合わせた内容となっている。著者は、景気動向により非正規労働者から正規への回路が狭まってユニオンが必要となること、ブラック企業とは労使関係の問題であり、働き方の集団的規制が出来ていないことが問題だと指摘している。学生には労働法と共に集団的に解決することを教えつつ、労働市場を規制するユニオンの役割が重要とまとめている。

編著者は、ここまでの第1～4章を第I部「大学におけるキャリア教育論の実践と課題」とし、続く第5～7章を第II部「大学外部におけるキャリア支援の取り組み」として構成している。

第5章の著者は、マージナル（非選抜型）大学生の特徴として、認識と関係の「おくれ」を指摘し、日本型雇用の周辺・外部へ排出されるとの先行研究から、私立上位と下位に分けて、学生の背景や学習状況を比較した結果を導き出している。私立下位は、出身階層が低く、勉強も得意ではないが、不真面目ではなく、彼らの通う大学が生活実感に伴う職業・社会生活と結びついていることで自信を得ているとまとめている。また、ノンエリート大学生は、非正規雇用が多いだけでなく、規模が小さな会社勤務・販売員か現業職・転職が多い、といった特徴があると分析した。著者は、政策に左右されがちな非正規雇用に焦点をあてたキャリア教育も必要であると考え、社会サービスや社会保障制度の知識が役に立つと指摘している。さらに、地元で地域社会に根差しているノンエリート大学生に対する、地域実態に即したキャリア教育の必要とそのための地元の組織・団体との連携に注目している。

第6章では、心理支援とキャリア支援の融合と、様々な機関が連携しての実施必要性が述べられている。具体的には京都若者サポートス

テーションによる高校との連携事例が紹介されており、著者による現場状況の詳細な描写から、生徒・教員・学校それぞれに目を配った取組みが伝わってくる。高校内にキャリアサロンを設置することの意義・効果・課題がよく整理されている。これらの事例は、思春期に日常的に関わることで、そこから心理支援、キャリア支援へと複合的な取組みで将来の夢や希望につなげさせる事例である。生徒同士の関係性の継続が最大の支援効果の表れというまとめとともに、丁寧な支援で、意欲を育める場所づくりの大切さが強調されている。

第7章は、貧困・低所得層地域の教員インタビューによる子どもたちの実態紹介（2009年）から始まる。貧困という特殊性を加味しなかった教師の事態があったことを確認するとともに、子どもたちの特別な事情に対応した学習支援事業（2014年）を紹介している。学習支援事業による変化として、著者は、大人への信頼醸成という点を捉えている。ただ学習支援事業は福祉行政の範疇であり、限界がある。教育的アプローチの限界を超えるには領域横断的な協働と連携が必要とまとめている。

これら各章の論述から導かれるこれからのノンエリート・キャリア教育の展望を、終章で編著者は次のようにまとめている。「適応」への戦略は「学び直し」と「承認」が初めの一步である。「抵抗」の戦略は「意義申し立て」の能力涵養であり、それは「参加」から始まる。「承認」へは「第三の場所」が有効であり、ヒューマンライブラリーが参考になる。さらにスウェーデンの中学社会の教科書を「参加」の戦略論として紹介している。この教科書は若者を社会の主体として育てるべく「社会は変えていける」と伝えている。最後に編著者は本書のまとめとしてこう述べる。ノンエリートの若者には多面的な承認の場が必要である。本書はそ

れを創出するための「現場の実践論」であり、「包括的な政策論」となる。

## 2 評者の感想

本書を読んで、評者は、先ず編著者のノンエリート学生を想う気持ちと周りへ感じているもどかしさに心打たれた。そして、現場を大切に、いま・ここを信じる編著者の姿勢に大いに共感した。

評者は元商社マンである。営業から人事へ移り、キャリアカウンセラーの資格を取り、社内キャリアカウンセリング室で社員相談の対応を行ってきた。キャリアカウンセリングの周辺分野、すなわちグループファシリテーションや臨床心理を学び、定年前に退路を断って大学へ転職し、キャリアセンターのキャリアアドバイザーになった。現在はキャリア科目教員として、学生数最大では580名のクラスで毎回グループワークを課している。就活での会社採用側と大学での学生支援側双方の現場を知ること、シナリオの無い（その場で考えて話す）授業進行を特徴としている。毎回授業のリアクションペーパー（小レポート）を採点するため、他の2コマと合わせて半期1万枚と格闘している。この授業の場で、やるべきことをきっちりこなすという「人間としての在り方を身に付けて欲しい」との想いをもって取り組んでいる。

そういった評者の立場からの本書への注文は、政策論ではあっても著者自身が考える現場での対応策をもっと述べてほしかったというものである。例えば、教員各自がもっと学生と向き合う覚悟を持つべきとか、必要に応じてメンタル問題理解・対応への教員の教育体制を整えるとか、現実の学生の立場に立った考えや受けとめ方を加えると、より理解しやすくなったのではと考える。

以下、章ごとに評者のコメントを記したい。

序章では、ノンエリートを元気にするために関係者に期待する方策が熱く語られている。より理解してもらえるようにとの意図から付されたカッコ書きでの注釈が多く、読みにくさを感じる読者がいるかもしれない。しかし、教育の論理を越えた課題を抱えた学生への対応に目を向けている点に編著者の熱意が読み取れる。一方、現在の状況報告に留まっている点が残念だともいえる。

第1章では、この本・内容の意義をくみ取るに十分な現場の実態が述べられている。欲を言えば相互作用型授業で他者を知り、そこから自分を知って見つめ直す必要性に踏み込んで欲しかった。ただ学生のレベルにかかわらず、いかに教育に手を掛けるかが求められているという点はしっかりと課題設定されていた。

第2章では、多彩な現場事例を提示し、具体的に詳しく説明がなされているので、現場に触れる機会を持たない読者への理解に役立つ内容となっている。出来れば、各項目での事例紹介に留まらず、著者の論評やさらなる提言が欲しかった。

第3章では、進路決定の状況は労働者の権利理解では阻害されないと著者は研究結果をまとめている。それに基づいて、大学でのキャリア教育における労働者の権利教育の意義を確認し、慎重さは無用と論じている点は、現場教員のモチベーションを上げると信じる。どうすれば労働者の権利理解の必要性を学生に認識させられるのかについての方法論まで触れられていれば、より現場への貢献度は大きかっただろう。

第4章では、労働組合が入った集団的労働交渉の実際と効果が具体的に分かり易く解説されている。労働組合の役割は、法律と権利の伝達に加えて、権利行使のノウハウ理解と簡潔に整

理されている。ブラック企業問題は若者の働く環境問題の縮図といえる。それを業種・大学キャリアセンター・自殺・メンタルヘルスそれぞれの視点から分析したことに評者は説得力を感じた。

第5章では、著者がノンエリート大学生の属性について多角的に分析しながら、彼らの友人関係や就職先に地元指向がある点に着目したことに、評者は共感する。さらに非正規雇用労働者もしくは無業者をも想定して、キャリア教育における社会サービスや社会保障制度の知識教育の必要性が述べられていて、この視点も斬新である。

第6章の高校におけるキャリアサロン運営報告では、評者は、優しさと厳しさのバランスの大事さを認識した。安心できる空間づくりと生徒たちの自主性を尊重した自己肯定感を高める部屋づくりに素晴らしい工夫を感じた。また、高校での支援にオールラウンダーなキャリアカウンセラーの必要性とその奮闘ぶりが良く伝わってきた。一方、事実描写が中心であり、その当事者がそれぞれの場面でどう考え・どう動いたのかが書かれていないのが残念でもあった。

第7章における、学習支援の場で子どもが否定的な言葉をかけられる原因となる要素を除いている工夫は、示唆に富んでいる。子どもの貧困対策としての教育の限界はケースバイケースで異なる。子ども一人一人に目を向けて、地域

の中で様々な大人との関係が続いていること、気にかげられることを意識させる指導を緻密に行う必要性を、再認識させられた。

終章で編著者が、「承認」の経験が「適応」への第一歩と強調している点に、評者は全く同感だ。自分を知るために他者を知る大切さを強調しているところに共感する。ノンエリートの若者たちの承認課題に対して、ここで紹介されたように、様々な資源の連携による「若者たちのサードプレイス」が創出されることを願う。またスウェーデンの教科書引用では、自らの考えを引き出させる姿勢が素晴らしいと感じた。与える課題のユニークさに目が行くが、まず自分の考えを書き出させる、のちに討論させて他者の意見を聞き、異なる価値観に触れて内省させるという手順にこそ意味があると評者は考える。

編著者は「あとがき」で、この本が大学教員の新たな「キャリア」を示す可能性に触れている。それはこの本の随所にこれからの大学教員に期待される知識・姿勢・意気込みが埋め込まれているからだ。大学教員に留まらず、これからの若者を支援する大人たちすべてにこの視点を持っていただければと願いつつ、編著者のさらなる研究と実践に期待したい。

(居神浩編著『ノンエリートのためのキャリア教育論——適応と抵抗そして承認と参加』法律文化社、2015年2月、viii+216頁、4,200円+税)

(ありた・ごろう 法政大学特任講師)